

ISSN 2434-9690

# 東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会  
2020年1月

# 目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
[特別寄稿]	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
[対照研究]	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
[日本語研究]	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
[中国語研究]	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

# 文の材料としての単語と連語

## Words and Collocations as Sentence Materials

鈴木 康之  
SUZUKI Yasuyuki

### 0. はじめに

「文」は、具体的な言語活動の基本的な単位といえるのだが、その「文」は、ひと切れの現実を名づける単位としての「単語」をもとにしてつくられている。また、その一方で、単語をくみあわせてつくられる「連語」も、また、「文」の材料であるとされている。ここでは、「文」の材料としての「単語」と「連語」とをとりあげて、その関係をかんがえてみることにする。このことに関して、わたくしは、かなり昔から、連語論に関する論文などで言及してきているのだが、あらためて、ここで問題提起をしておきたい。なお、ここでの論述は、かなり『現代日本語の連語論』のものと重複している。

### 1. 文と単語

「文」と「単語」との関係については、わたくしは、比喩的に、つぎのようにかんがえている。「文」は「具体的な現実をうつつだす単位」であり、「単語」は「ひと切れの現実を名づける単位」である。

「単語」の規定は、「ひと切れの現実を名づける単位」とされるものなのだが、そのばあいの「ひと切れの現実」とは、現実中存在するモノ(たとえば、「山」「つくえ」「メガネ」)だけではなく、現実の一側面(たとえば「高い」「広い」「崩れる」)、現実中存在するモノの一側面(たとえば「鳴く」「登る」「かわいい」)、さらには側面の側面(たとえば「キャンキャン(鳴く)」「ゆつくり(登る)」)など、つまり、現実中存在する部分・側面など森羅万象すべてを意味する。人間は、現実中存在する部分・側面など森羅万象すべてを「単語」というかたちで名づけているのである。このことは、日本語にかぎらず、英語であろうと中国語・韓国語であろうと、言語であれば、基本的に共通している。

ついでながら、人間が「文」をくみだてて現実をうつつだしているということは、比喩的に表現するとすれば、人間は、文をくみだてることによって(さらには、その「文」をつらねて「話」「文章」をつくることによって)、現実を再構成しているのだということができるだけだろう。もちろん、文によって再構成された現実には、現実を反映させているのだが、しかし、真の現実とはちがっている。そこには、話し手(書き手)による推察や願望などももりこまれている。未来の現実を予想することもできれば、ときには、うそをつくこともできる。

このようなことが生じるのは、みな、言語としての現実の反映であって、ひと切れの現実を名づける単位としての単語をくみあわせることによって、「文」というかたちで、話し手(書き手)が現実を再構成させるものだからである。

## 2. 連語の位置づけ

わたくしの考える連語論は、さかのぼって、奥田靖雄「連語論(特に、ヲ格の研究)」やヴィノグラードフ「単語のくみあわせの理論」を学習し、自分なりの連語論研究をすすめていたころは、わたくしは「構文論 syntax」の領域に属する分野である、とおもっていた。つまり、連語(単語と単語とのくみあわせ)の研究を文法論(構文論)のなかに位置づけていたのである。

しかしながら、そのうちに、単なる「単語と単語とのくみあわせ」の研究から、名づける単位としての「連語」を意識化するようになった。つまり、単語と単語とのくみあわせの研究をふまえて、「名づける単位としての連語」を抽出するようになったのである。

この「名づける単位としての連語」とは、単語と単語とをくみあわせるという文法的な手法を利用して、名づけをより具体化・精密化したものである。具体的な例でいえば、たとえば「あさ、食堂でカレーライスを食べた。」というばあい、かつては、「あさー食べる」「食堂で一食べる」「カレーライスを一食べる」など、みな連語論の対象とする単語のくみあわせとしていたのだが、「名づける単位としての連語」としては「カレーライスを一食べる」とし、「あさ、食堂で……」を除外した。

わたくしは、このような「名づける単位としての連語」を意識し、それを研究する分野を「連語論」とかんがえるようになったのである。時期としては、20世紀末期、呉大綱さんや彭広陸さんの学位論文を指導していたころかとおもわれる。その後、21世紀の初頭、2005年以後、高橋弥守彦さん・王学群さん・白愛仙さんたちとのプライベートの研究會(わたくしの連語論研究の検討會)を介して、そのかんがえを確定してきた。(なお、呉大綱さんの博士論文については、動詞を核とする名づける単位としての連語を概観するようにと指導したつもりである。)

このような「名づける単位としての連語」の研究は、単語をくみあわせることにより、名づけをより具体化・精密化したものであることから、文法論(構文論)のなかには位置づけられないことだろう。以前のわたくしの連語論では、その研究対象を単語と単語とのくみあわせ全体としていたのだが、その後、わたくしは、名づける単位としての連語のことを「単語と単語をくみあわせて、より具体的な名づけを実現させているコトバの構造物」であるとかんがえるようになって、連語論を文法論のなかだけに位置づけるのではなく、独自の研究分野であるとしてきたのである。

ついでながら、名づける単位としての連語は、総体として、一定の構造的なシステムをつくっている。日本語の連語については、その総体として、不完全ながらも、『現代日本語

の連語論』で概観していただけるとおもっている。

わたくしたちがかつて「連語論」であるとしてきた研究分野については、あらためて、名づけを具体化・精密化してみせる語彙論のなかに位置づける「名づける単位としての連語」の研究、と、文法論(特に構文論)のなかに位置づけるべき「単語と単語とのくみあわせ」の研究、とに整理してみせなければならぬだろう。

### 3. 名づける単位としての連語

勝手な感慨をのべるようで恐縮だが、かつて、わたくしは、…「連語」という単位は、カスミのような存在である、水滴でもなければ雲でもないだろう、とかんがえたことがあった。

人間の言語は、高度に発達し複雑化している。そして、そのことは、語彙と文法とのあり方にも複雑な状況を生んでいる。たとえば、「たべる」という人間の動作には、「リンゴをたべる」「パンをたべる」「ごはんをたべる」など、実に、さまざまなばあいがあるだろう。それら人間の動作をすべて「単語で名づけなければならないとするならば、天文学的な数字に相当する無数の「単語」を生みださなければならない。

ところが、人類は聡明である。「たべる」という動作での種々のちがいは、そのまま、単語をくみあわせ、「リンゴをたべる」「パンをたべる」「ごはんをたべる」などのままで、名づけを実現させている。もともと、単語をくみあわせるという手法は、名づける基本的な単位としての「単語」を材料として、言語活動の具体的な単位としての「文」をつくりだすためのものである。また、そのルールは「文法」に所属するはずである。ところが、人類は、その文法ルールをそのまま「名づけ」に利用してきたのである。

あらためて、高度に発達した現代の「言語」をかんがえてみたい。ひと切れの現実を名づける単位としての単語は、文の材料ではあるのだが、どのような文をくみたてるかにかかわらず、その単語の名づける意味を具体化するという必然から、他の単語とくみあわせるということが義務づけられている。つまり、連語(単語と単語とのくみあわせ)に関するルールである。連語とは、単語と単語をくみあわせて、より具体的な名づけを実現させているコトバの構造物である。(名づける単位としての「連語」を研究対象とする言語学の分野は、「連語論」とよばれている。)

### 4. 文の材料としての連語

連語としての「リンゴをたべる」「パンをたべる」「ごはんをたべる」などは、いずれも名づける単位なのだが、具体的な言語活動での個々の発話「(だれかが)リンゴをたべる。」「(だれかが)パンをたべる。」「(だれかが)ごはんをたべる。」などは、もとより「文」である。そのような意味では、「名づける単位としての連語」と「文を構成する単語のくみあわせ」とのあいだを機械的に区分することは困難である。名づける単位としての連語は、

単語と同様に文の材料である。ただ、文法のルールを内在させながら単語と単語とをくみあわせているので、連語における単語と単語とのくみあわせは、個々の単語に分解するかのようにして、文の構造に活かされるものである。たとえば、連語「リンゴをたべる」「パンをたべる」などは、文の材料として、まず、「太郎が(主語)リンゴを(対象語)たべる(述語)。」「花子が(主語)パンを(対象語)たべた(述語)。」のように使用される。つまり、ごく普通の文に使用されるばあいには、「リンゴを」「パンを」は対象語として、「たべる」は述語として、文の構造に参加するものなのである。さらには連語は下記のような文にも使用されることになる。

- 太郎はリンゴまでもたべた。      ○花子はパンをたべるつもりだ。  
○リンゴは太郎がたべた。      ○花子がたべたのはパンだった。

このように使用されることになると、連語の構造と文の構造とを同一視することができなくなる。連語論が対象とする連語とは、文の材料として独自に参加可能な単語をくみあわせての名づける単位である。したがって、具体的な「文」への参加には、さまざまな事象が生じることだろう。連語の構造がどのように文に生かされるかについては、あらためて精査する必要がある。今後の言語学研究者の活躍に期待したい。

## 5. 語彙と文法とのハザマ(連語論の再検討)

名づける単位としての連語は、単語と同様に、文の材料である。ただ、文法のルールを内在させながら単語と単語とをくみあわせているので、連語における単語と単語とのくみあわせは、そのまま、文の構造に活かされるものである。

くりかえして、言語の単位としての「連語」をかんがえておきたい。単語をくみあわせるという手法は、もともと、名づける基本的な単位としての「単語」を材料として、言語活動の具体的な単位としての「文」をつくりだすためのものである。そのルールは、文法に所属する。その「文法」としてのルールを「名づけ」に生かしたのである。人類の英知のみごとなさを実感させられる。

名づける単位としての連語は、語彙と文法とのハザマに生じた言語現象である。連語論の対象とするような「名づける単位としての連語」をどこからどこまでであると限定することは困難なことだろう。一般に、人類の英知の結果としての言語現象は、単純に説明することのできるような次元のものではない。高度に発達してきた人類の言語は、つぎつぎに矛盾をうみながら、さらに高度に言語の発達をかさねてきている。

そのような高度に発達してきた現代日本語について(そして、そのことは日本語だけの問題ではないのだが)、その発達・発展の原理・原則を見きわめるべきである。さらには、実務的・実用的な観点から、現代日本語の言語現象を常識的に整理・整頓してみるべきなのではないだろうか。